

ひとつの「学習テーマ」は、すべて取り組みやすいように4ページ完結。この「サンプルテキスト」では、各「テキストブック」からひとつずつ、合計3つの学習テーマを抜粋していますので、ぜひ実際に取り組んでみてください。

「テキストブック 1」は、文法解説と短文での演習で構成されており、一般の文法書や辞書にはない実務翻訳の定石や、実践適用例、語法が満載です。解説も要所を的確におさえられるように、必要なポイントに絞っています。

3-2 能動態と受動態

Step 1

ひとつの「学習テーマ」に「Step1」と「Step2」の演習を設け、ステップアップ式で着実に実務翻訳の基本テクニックを自分のものにできるようになっています。

次の各英文を「ですます」調で、自然な日本語に訳してください。

(1) If the command is aborted, you will see the message on the screen.

(2) This machine can be operated manually.

(3) The calculation starts immediately after clicking the menu item.

(4) This hypothesis coincides with our simulation results.

(5) This system consists of data processing units, user interfaces, and control units.

Step 1 の解答・解説

(1) コマンドを強制終了すると、メッセージが画面に表示されます。

前半は受動態ですが、直訳すると「コマンドが強制終了されると」(△)となり、やや不自然な日本語となります。ここでは「態の変換」というテクニックを利用して「コマンドを強制終了すると」(○)と能動態のように訳します。後半は you を主語とする能動態ですが、「あなたは画面にメッセージを見るでしょう」(×)では稚拙な訳となってしまいますので、「メッセージが画面に表示されます」(○)のように受動態で訳するのが自然です。

(2) この機械は、手動で操作することができます。

can be ~ のように助動詞を伴う受身の構文では態の変換が多用されます。この場合、「操作されることがあります」(×)とそのまま受動態で訳すと不自然な日本語となります。ここでは、「手動で操作することができます」(○)のように人主体表現(動作の主体は「ユーザー」)にして訳します。

(3) そのメニュー項目をクリックすると、ただちに計算が実行されます。

英語の自動詞を日本語に訳す場合、日本語の受身形のように訳すことがあります。例えば、動詞 start は自動詞と他動詞の両方がありますが、この英文前半の The calculation starts を直訳すると「その計算が実行する」(×)となり、このままでは日本語として不自然です。したがって、「態の変換テクニック」を利用して「その計算が実行される／開始される」(○)のように訳します。この場合、start が自動詞で使われているのは、「ユーザーがメニュー項目をクリックすると、コンピュータが自動的に計算を開始する」というニュアンスを明確にするためです。

(4) この仮説は、我々のシミュレーション結果と符合します。

ここでは coincide は自動詞ですが、A coincide(s) with B の形で「AはBと符合(一致、合致)する」という意味になり、**あたかも他動詞のように訳します。**

(5) このシステムは、データ処理装置、ユーザーインターフェイス、制御装置からなります。

「自動詞+前置詞」の組み合わせである consists of ~ は、一見すると能動態に見えますが、実際に訳す場合は「~からなる、~から構成される」のように受身の文として訳します。この consists of ~ は、be constructed of ~、be made up of ~、be formed of ~ などの受身の動詞とほぼ同義です。

Step 2

次の日本語を英文に訳してください。

「英文和訳」だけでなく、必要に応じて「和文英訳」の演習にもチャレンジ。
 “日本語→英語”訳の学習アプローチも取り入れることで、「学習テーマ」に対する理解が深まり、“英語→日本語”訳の完成度もより高まります。

【原文】データのバックアップは、定期的に行うべきである。

ヒント：「定期的に」 on a regular basis

文法解説・ここがポイント

▶ 態を変換して訳すテクニック

動詞の構文には「受動態」(受身)と「能動態」があります。日本語にも受動態と能動態がありますが、両者の言語間では必ずしも態が厳密に一致するわけではありません。例えば、英語の受身は(～ is used など)は、日本語では能動態(「～を使用する」など)のように訳したほうが自然な場合が多く、このように態を変換して訳すテクニックを「態の変換(転換)」と呼びます。

態の変換とは、日本語または英語での訳文表現をより自然なものとするために用いられるテクニックです。

態の変換にはいくつかのパターンがあり、出現頻度の高いパターンとしては、次のようなものがあります。

- (1) 英文の受動態→日本語の能動態
- (2) 助動詞を伴う英文の受動態→日本語の能動態
- (3) 自動詞を用いた英文→日本語の受動態

▶ 物主体表現と人主体表現

態の変換にはこれ以外にも様々なパターンがあります。例えば、同じ動詞で自動詞と他動詞の両方の用法を持つものは、次のように「動作の主体」を意識して使い分けられています。

The program runs automatically. →動作の主体は「プログラム」
 (そのプログラムは自動的に実行を開始する)

Run the program. →他動詞を先頭にする命令形なので動作の主体は「ユーザー」
 (そのプログラムを実行しなさい。)

最初の英文の automatically は省略可能です。もともと自動詞を用いた英文は「人(ユーザー)が介在しなくても自動的に実行される」というニュアンスが強いからです。

動作の主体がプログラムなどの無生物である場合、「物主体表現」と呼びます。一方、動作の主体がユーザーなどの人である場合、「人主体表現」と呼びます。

実際の英文では、どちらの表現でも同じ意味を表せることも多いのですが、「物主体表現」と「人主体表現」をきちんと区別しておくことが大切です。

Step 2 の解答・解説

【訳例】

The data should be backed up on a regular basis.

原文の日本語では「行うべきである」と能動態になっていますが、英訳では、主語が行為者ではなく、主語を The data として、should be backed up のように受身で書くのが自然です。また、「定期的に」の訳語としては regularly や periodically などの副詞も使えます。

「文法ワンポイント」では、番外編として文法事項のトピックを取り上げ、「テキストブック」本文の内容とは別の視点からも文法を解説。実務翻訳に欠かせない文法について、幅広い知識や応用方法を蓄積していくことで、翻訳テクニックの幅も広がっていきます。

● 文法ワンポイント

これまで、公文書や科学レポート・論文などは、受動態で書くのがunwritten rule(暗黙の了解)とされてきましたが、最近では力強い能動形で書くのが好ましいとされる傾向があります。筆者も英語論文の査読など多くの英文チェックをしてきましたが、いわゆる読みやすい英文ほどその傾向があるようです。

また、助動詞should(義務)やshall(絶対的義務)は、本来は社内の開発者などに製品のスペックなどを指定する仕様書(specifications)で用いられる助動詞ですが、それに準じた助動詞の用い方も実務翻訳では少なからず見られます。

なお、Step 2 で the data (○) と、ここで定冠詞を使っているのは、現在説明している作業においては「特定できるデータ」というニュアンスがあるからです。ここで、無冠詞で data (×) にすると「すべてのシステムの状態においてのデータ」となり、あまりにも広い範囲を示すニュアンスになってしまうのでやや不自然です。

Column 3

「テキストブック」の合間には、「Q&Aから読み解く疑問点の解決」「実務翻訳者の心構え」「スケジュール管理の方法」など、ときにはクイズも交えながら実務翻訳にまつわるホットな情報を提供する「コラム」も掲載。

Q&Aから読み解く間違いやすい表現

今回は、現在完了と現在形、冠詞の使い方について、質問から読み解いていきましょう。

【質問】

原文：こうしたサービスを提供できる製品は、多くのベンチャー企業によって開発されている。

訳文：Products which provide such services are developed by many venture companies.

英訳する際の時制についての質問です。上の訳文では、“are developed”と、現在時制で英訳しているのですが、この場合「製品が多くのベンチャー企業によって開発される。」という行為を述べる意味になってしまうと思うのですが、例えば、原文を「すでに開発されていて、今も製品が存在している」のであれば、現在完了形の“have been developed”の形がふさわしいのではないのでしょうか？

【回答】

ご質問の内容は和文英訳ですが、逆に英文和訳のアプローチでお答えした方が分かりやすいかもしれません。以下の現在形の英文には3通りの解釈があります。

Products which provide such services are developed by many venture companies.

- (1) こうしたサービスを提供できる製品は、多くのベンチャー企業によって開発される。
(必然的な行為)
- (2) こうしたサービスを提供できる製品は、多くのベンチャー企業によって開発されている。(事実)
- (3) こうしたサービスを提供できる製品は、多くのベンチャー企業が開発するものである。
(説明)

現在形とは、現在を中心に過去または未来を含む幅のある時間を表し、文脈に応じてこれらの3通りの意味で用いることができます。ですから上の原文の英訳として現在形を採用するのは間違いではありません。もちろん、以下のような現在完了形でも問題ありません。

「コラム」のほかに、“ちよっと息抜き～文法こぼれ話～”や“実務翻訳者のすすめ～”など、佐藤洋一先生による、現役で活躍する実務翻訳家ならではのエッセイも収録。
演習や解説以外にも、実務翻訳家に大切な素養を育むための工夫が満載です。

Products which provide such services have been developed by many venture companies. (こうしたサービスを提供できる製品は、多くのベンチャー企業によって開発されてきた。) この現在完了形の原文は、「～開発されてきた」(○)「～開発されている」(○)と訳すのがよいでしょう。ただ、「～開発されている」だと現在の事実のことにもなりますので、「多くのベンチャー企業がこうしたサービスを提供する製品を開発してきている」(○)と態を変換して訳した方が自然でしょう。

【質問】

マニュアルの訳文で、次のように冠詞 (the/a) が付いたり付かなかったりバラつきがありました。チェック作業で統一したいと考えていますが。

原文：ピンはハイインピーダンス状態になります。

訳文1：The pin is placed in the high impedance state.

訳文2：The pin is placed in a high impedance state.

訳文3：The pin is placed in high impedance states.

例えば、定冠詞を付けて the high impedance state とした場合は「端子によって限定されるハイインピーダンス状態」、また、不定冠詞を付けて a high impedance state とすると、「いくつかの状態のうちの1つであるハイインピーダンス状態」という感じで理解しています。そうすると、無冠詞複数形の high impedance states の意味がよく分からなくなってきます。上の3種類の訳文の違いを教えてくださいませんか。

【回答】

定冠詞 the、不定冠詞 a(n) のとらえ方はそれでよいでしょう。冠詞や無冠詞複数形の使い分けは、文の内容によって異なりますが、上記の原文に限って言えば次のように区別できます。

定冠詞 the の場合、

特定の数値が予想されるハイインピーダンス状態。

不定冠詞 a(n) の場合、

数値が変化すると予想されるハイインピーダンス状態。

無冠詞複数形の場合、

ある程度の幅があるものの、low と high の impedance を「区別」できると予想されるハイインピーダンス状態。

必要に応じて、上記のように区別して使い分けるとよいでしょう。